

Seaside



Bound

R18
For Adult only

閉ざされたカーテンの隙間から、赤に近いオレンジの光が細く入り込んでいた。それはまるで二人を分けるかのように引かれていて、エディスは眉を顰める。

ベッドの上にこんもりとシーツの山ができていて、そこからギールの足が出ていた。エディスは手探りで壁を伝って冷房の電源を点ける。頭から被っていて暑くはないのだろうか？

「ギール、大丈夫か？」

ベッドの傍らまで行って声を掛けるが反応がない。寝ているのかと思ったが、シーツに手を触れると「触るな！」と鋭い警告がきてピクッと体を揺らす。

「今は優しくできない。出ていって」

引っ込めた手も、案ずる気持ちも持っていきようがない。ただただ拒絶のみを受けたエディスは無力さに首をうなだれた。

優しくなどしてほしいと思っははいない。一緒にいたいだけだ。そう心中で呟くと、自分がなんの為に来たのかを思い出された。

エディスは荷物を長机の前に置かれている椅子に放り投げ、シャツを脱ぎ捨てる。脱衣所に駆け込んで白いハーフパンツも脱いでシャワールームへと入っていく。

自分だって子どもじゃない、みくびってもらっては困るのだと決意をして体を洗う。男は誰だって絶対にこういうのが好きだという手紙付きでシルベリアから送られてきた石鹸だ。そう、元々こうなることを望んできたのだ。

(予定の内なんだよ、馬鹿が……！)

なにが優しくできないだよと文句も露わに一人で準備を整えてからシャワールームを飛び出す。ガシガシと乱暴にタオルで体を拭いて出て行こうとして、ドアノブを持ったまま固まった。

どうせ脱ぐのだから着ても着なくても同じだ。そう思ったが、全裸で襲いかかるのはあまりにも変態度が高いように思える。熟考した上で貸し出し品のガ

ウンを羽織ってから出て行く。

ずかずか音を立てて歩いていき、シーツを引っ剥がす。強い抵抗に合うが、ベッドに足をかけて全体重で引っ張ると向こうが折れて剥がすことができた。ジトリとした目で睨まれたので、こちらも睨み返す。

シーツを床に放り捨ててベッドに乗り上げると、慌てて後ずさっていく。

壁際まで追いかけていき、腰を跨いで乗り上げると「エディー……？」困惑した様子のギールとようやく対面することができた。

確かにほんのりと体まで赤いのが見て取れる。肩に手を当てて胸を押しつけてエディスからキスをすると、頭の後ろを手で押さえつけられた。ぬるりと入り込んできた舌に驚いて引っ込めるが、追いかけられる。

ギールの舌は厚く、入りこまれるとエディスの口の中はそれだけでいっぱいになってしまう。さらに首の付け根を親指で撫で擦られ、脳まで痺れるような心地がしてきた。

「どうして来ちゃったの……」

ようやく口を離してもらえ、息を継ぎながらへろへろになった頭で「心配だったから」と答える。

「心配だったって、犯されるって分からなかった？ 誰かに教えてもらえなかったの？」

「うるさい、子どもじゃないんだから俺の勝手だろ」

尻の狭間に当たっている逸物はすでにパンツの中でパンパンに膨らんでいる。これが何時間も続くのだとしたら相当辛いだろうことが分かるくらいの熱を持っていた。

「んっっ……こんななってんのに、無理すんな」

俺がいるだろ、恋人だろと腰をかくかく揺らして擦り付ける。下着が先走り濡れていくのが分かり、エディスはギールの首に抱きついた。

「俺がするから、頑張るから」

いないことにして一人で我慢をするのはやめてくれ。そう伝えると、ギールは「知らないよ」と呟いた。

「逃げてほしい。傷つけないんだ」

「もう何回もしてんだろ！ なっ、中も……ちゃんと準備してきたから。大丈夫だ」

「駄目。泣いても嫌がられても止められないと思う。辱めて、全部暴いて、それでもまだ犯したいんだ。君が想像してるより、俺は」

そう言いながらも手でへその上をこすこすと擦ったり、今にも突き挿れたように腰を動かしているギールに呆れて「俺って頑丈だし、腹突き破ったりしなきゃ別にいいけど」と言う。

「覚悟もない癖に言わないで。今まで黙って俺に揺さぶられてただけでしょ」

あからさまな挑発を「なくない！ てか、それはお前が俺になにもさせてくれなかっただけだろ!？」と買ってしまってから口を手で押さえる。

コイツ俺を止めたいのか煽ってるのかどっちなんだよと睨んでいると手が伸びてきた。

唇を指でなぞるギールが舌で自分の唇を伝うのを見て、ごきゅりと喉を鳴らして唾を飲み込む。

「じゃあ、舐めて。子どもじゃないっていうなら、それくらいできるでしょ」

「で……できる！」

なにを？ と内心首を傾げていたエディスだったが、じゃあと足首を掴んでひっくり返されると悲鳴を上げる。肩に両足を引っ掛け、腕で押さえつけられると「なにすんだよ」と抗議の声を出した。

拳を振りかざしたエディスだったが、「ほら早く」と足を背中にのせられて潰れた声が出る。しかし、開けた目に入ってきたブツを見て（なんだ、そういうことかよ）と納得をした。

結局は据え膳は食べたいのだ、コイツだって男なんだから。

膨らんで先走りでシミのできたパンツに手をかけると、凶悪なモノがぶるんつと飛び出してきてエディスの鼻先をかすめた。

潮の匂いがしない、下着も変わっている。だからシャワーは浴びたのだろう。だが、鼻先をくすぐる匂いがどこか不思議に感じた。

酩酊したような曇った意識の中で匂いを吸い込んだエディスの腰が跳ねる。それだけで頭がくらんで、背筋に快感が走っていく。

「あ……………あれ？」

気が付いた時にはチュプチュプと音を立てながら口に咥えていて、驚いて離す。

(なんで？ 俺、やり方なんて知らないのに)

ギールが見ているという羞恥が薄くなっていき、エディスはペロペロと亀頭の先に浮かんだ先走りを舐めたり、尿道口に唇を押し当てて吸ってみたりした。

「エディー、こうやって。奥まで咥えて」

「へ、……………ひ、やあああああっ」

急に自分の下半身が熱い粘膜に包まれ、甲高い惑乱の声を上げる。腰を下から持ち上げ、まるで牛の搾乳のように口でしごかれた。

「やっ、やだ！ やだっ、あっ、ああう……や、やるから離せ。離せってば！」

あまりに強い吸引に出ると腰を震わせると、足で肩を挟まれてシャツに上半身を押しつけられた。足も肩に乗り上げていてバタつかせることしかできず、腹を抱きしめられて思い切り吸われる。

ろくに抵抗することも出来ず、まだ玉の方に引っ込んでいた精液を無理矢理吸い上げられたような状態だ。

「濃いね、また溜めてたの？」

「あっ、あっ、はあ……っ」

艶めかしい声を出しながら口に手を押し当て、急にきた快感を逃そうとしているエディスを見て、「そんなので俺を満足させられるの？」と愉快そうに笑

われる。

押さえつけたくせにと涙混じりに睨むと、「早くしないともう一回するよ」と舌を見せられたので、急いで前を向く。

大きく口を開けてみるも、ギールのそれは体格に見合った大きさだ。どうにも入りそうにない。笛のように横向きに舐めてみたり、先だけ啜えて余った分は手で擦ったりすると、ギールは気持ちよさそうに鼻を鳴らした。

「いいよ、離して」

もう少しで出そうだったのに、どうして。疑問に思いつつも口を離すと、濡れた舌から性器に糸が伝うのが見えて慌てて口を拭う。

「エディーの中に出すから、いいんだ」

いっぱい飲んでねと指を当てたギールに後孔を開かれ、息を吹きかけられたので「ぎゃっ」と色気のない叫び声が出る。

「やめろよ！ もー、いいから。挿れるぞ」

今日は俺がするからお前は黙ってろと言うエディスだったが、ふと違和感を覚えてギールを見た。

どうしてか彼は、笑っていた。

楽しそう、嬉しそう、ではなく歪なこちらを嘲るような笑みだった。

「君、挿れたらイキ死ぬんじゃないの？」

「————は？」

イキ死ぬ、の意味が分からず、瞬きをする。

「ちゃんと見なよ。俺のことばかり気にしてるけど、君だってよくない状況なんだよ」

ほらこれ、とギールの指が下腹部に触れる。ハートのような形状をしたそれに、エディスはうわっと叫んだ。

「はああ？ なんだこれ、こんなの彫った覚えないぞ！」

「こんなの彫ってたら怒るところだよ。セックスアピールでしかないでしょ」

女の子だったら子宮がある位置だよと言われ、エディスは顔を真っ赤にさせる。

「どうしてこうなったか分かる？ 見に覚えは？」

訊ねられ、エディスは多分と口にする。

「タコみみたいな足に持ち上げられた時に針みたいなのが刺さったから、そのせいだと思う」

まさかこんな卑猥な紋様が浮かぶことになるとは予想もしていなかった。

「インキュバスやサキュバスに狙われた人間に浮かぶ紋様に似てる……？」

「そういうのは分かるんだね」

なんで知ってるのと低い声を出すギールに「資料で見たから」と素直に答えた。

すると、呆気にとられたように「ああ、そう……」と呟く。エディスはあまり出会ったことがないが、返り討ちにあった軍人もいと聞く。

「なんの模様なんだろうって思ってたんだけど」

「あ、ひ……っ、馬っ鹿、さわんな」

指でくるくると撫でられ、腕を外そうと掴んだ瞬間ぐっと押しつけられて嬌声上がる。ビリビリと中に刺激が走り、足をバタつかせて悶えた。

「やめ、やめろ！ ナカ、おかし……」

まるで前立腺を直接触られているかのような感覚が続き、エディスは背を強ばらせて達する。

「快感を上げるのと、いった分だけ赤くなっていくね」

全部赤くしないと消えないんじゃない？ と耳元で囁かれ、小さく悲鳴を上げる。見下ろした先にある紋様は下の方が少し赤くなった程度だ。

「そんな、だって。もう二回も」

「何回イったら解放されるんだろうね」

知ってる？ と顎を掴んで耳元に顔を寄せてきて「一晩で消さないと、毎晩

犯されても満たされない淫売になるって」と囁かれ、エディスはやだと涙を浮かべる。

「やだ、なんで！　なんで、お前知ってたろ！」

俺が捕まってる所見てたんだろと肩を叩く手を握りしめられ、ううと獣のような呻き声を出す。

「知ってたよ。それがどうしたの」

「じゃあなんで俺を避けたんだよ！」

ギールは目を丸くしてから、ふっと息を吹き出した。「そんなの分かるでしょ」と肩を揺らして笑うギールに、エディスは分かんねえよと怒鳴る。

「一晩我慢するだけで、君は毎晩自分から俺に犯されに来るしかなくなるんだから」

貞潔な君のことだから俺以外には頼めないだろうしねと言うギールに、エディスは頭を殴りつけられたかのような境地に突き落とされた。

「は……、え？　なに、なんで」

なにかひどいことを言われている。それだけは分かった。だが、逆にいうとそれしか分からない。

「でも残念。来ちゃったからね」

満足するまで犯してあげると笑いかけてくるギールから逃げたくなり、後ずさろうとするが、立てた膝に背を擦りつけるだけになってしまう。

「やだ、ギール。なんで」

涙が溢れて止まらなくなってきた、エディスは手で拭った。優しく、大切にしてくれるはずの恋人の口から出てきた言葉だと思えない。

「うそだ……」

泣かないでと手を握られ、涙を吸い取られる。その触れ方も、声色もとろけそうな程に優しいのに。

「大丈夫。全部覚えててあげるから、エディーも体で覚えててね」

途中で意識を失っても起こしてあげると頬から胸に手を滑らせ、乳首を吸われる。そうされると心臓まで全部吸い取られるんじゃないかという恐怖心さえ芽生えそうになった。

「ほら、早く挿れて。自分から跨がってきたのに、いつまでそうしてるの？」

僕はお馬さんじゃないんだよと腰を跳ねさせたギールに、エディスは顔を腕で覆って「嫌だ」と奥歯を噛みしめる。

「もう、しなかったらどうなるか忘れたの？」

俺はそれでもいいんだよと言われ、エディスは嫌だ嫌だと子どものようにむせび泣く。だが、どうにもならないことを悟ると手を離す。

「泣いてる顔もかわいい」

未だしゃくり上げるエディスの背を撫で、「いい子だね、エディー」と口を奪ってくる。

「幸せにしてあげる」

この男は、一生自分を離すつもりがない。

「ほら、早く。俺を迎え入れて」

金の目に捉えられ、ホテルの一室が檻のようにさえ思えてくる。恐怖心に支配されないように「クソ野郎」と罵ってみるが、余裕ぶった笑みを崩さない。

肩に手を置き、もう片手でギールの長大な性器を握って位置を調節してから腰を落とす。そもそも、今までベッドの上では姫のように扱われていて、自分から招き入れるような真似などしたことがない。

手探りで行っているというのに、興奮が最高潮に達している男の怒張は膨らみすぎて入りそうになかった。ちゅぶちゅぶと音を立てて吸い付くのが恥ずかしく、早く早くと迫り立てる。

ようやく雁首まで挿れられて、肩で息をする。少し休憩してから残りをゆっくりと——と考えていたエディスの腰が、両手でわし掴まれた。

「ん、う、うう……………ひっ、～～～うああっ！」

疑問に感じる前に一気に引き落とされ、パチパチと目の前が弾ける。

ぷしゅっと音がして、見下ろすと自身の陰茎に透明な液がまとわりついて流れ落ちていくのが見えた。

「は、え……？」

腹の内側から音がして、エディスは思わず手でそこを押さえる。

「ひ、やあああっ」

ジェル状にこごった精液が大量に噴出され、エディスは腕を突っ張ってギールから逃げようとする。だが、肩を押さえられて多量の精液を全て収められてしまった。

「やっぱり君のここ、気持ちいい」

何回やっても飽きないと言ったギールにベッドに引き倒され、そのまま片足を持ち上げられる。

「エディー、小さいから簡単に奥まで入っちゃったね」

いつものことなんだけど、とくつくつ喉の奥で笑うギールになにか言ってやりたいのに、一気に挿れられた衝撃で口が聞けない。

達した後で敏感になっているナカを好き勝手に穿たれてエディスは身じろいだ。文句を言おうとした口を口で塞がれ、舌で押し込められる。

「はっ、は……っ、は、アッ……あう」

ふやけた口が離され、顔に何度もキスをされた。それに誤魔化されているとさえ感じる。

挿れたばかりのナカをごしごと削るように陰茎が出入りしていく。あまりの激しさに背に手を回して縋ると笑い声が上から聞こえてきた。

「エディー、誰に犯されてるのか分かってるの!？」

「ぎ、あっ、ああ、んあう！ や、~~~~あっ、ぎいる……っ」

舌っ足らずに名前を呼ぶと、そうだよねえと同意を得る。「そうなのに、俺に縋っていいの？」と訊ねられて、わけが分からないままに首を振った。

「んっ、ん……！ だって、他に縫るものない……」

「俺に犯されてるのにねえ。ああ、可らしい」

可愛いと吹き込まれ、エディスはまた視界が滲むのを感じた。こんな風にくちやぐちやに犯されて、悲鳴を上げているのが彼にとっては”可愛い”と感じるものなのだ。

「犯さないで、やだっ、やだあ！ ごめんなさい、来てごめんなさい！」

「いいんだよ。嬉しかったから」

俺を心配してくれたんだよねとさっきとは真逆のことを言うギールに奥を穿たれ、エディスはひぐつと息を詰まらせた。

「おくっ、おく、やめて！ やっ、まてって、やだああっ！」

「どうして？ 気持ちいいんでしょう」

だってこんなに喜んで、ナカが震えて俺のに絡みついてきてると言われて、違う違うと首を横に振って否定する。

「違わない」

ほら、と動きを止めたギールが腹に手を当てた。

「あっ、あ、うそ……っ」

その下でビクビクと戦慄している。ナカが歓迎して吸い付くように煽動していて、受け入れた口も収縮を繰り返して嬉しがっているのだと、それだけで分かった。

「そんな、浅ましい」

「セックスってそういうものだよ」

「い、ああああああっ……ひっ、んくうっ」

淫紋を撫でながらこちゅこちゅと前立腺に先端を押し当て、突き上げられたエディスは悲鳴を上げた。

「そこ、ばっか……あ、あ——っ、ああっ！」

長いストロークで引き抜き、また前立腺を擦って奥まで押し込まれる。ぎゅ

ううと慎ましく閉じている奥に押しつけ、ぐりぐり腰を回すギールにエディスは恥をかなぐり捨てて頼み込む。

「お願い、そこやだ。やだ、前立腺なら擦っていいから、いやあああっ、ん、んんうっ。うーっ、ううう」

「だあめ。後でここも突き破ってごしゅごしゅ扱いであげる」

口を大きな手で覆ってきたギールに「エディーの子宮にたっぷり注いであげるね」と笑われ、エディスはあまりの恐怖に「なんでもするから」と口にする。そこは以前に挿れられた時、あまりの快感に失神した場所だった。

「お願いは聞かないよ。だって、言われなくたってなんでもしてもらうからね」

あ……と言って、エディスは口を閉じる。好きな人を詰る言葉ばかりが出ていきそうになって、唇を噛みしめた。

「大好き、愛してる」

汗で張り付いた髪を指ではらい、額に口づけてくる男に「人を撲殺できそうなサイズのを人の腹ん中に突き入れてるくせに」と弱弱しい力で肩を叩く。

「やだなあ、人聞の悪いこと言わないでよ」

そう言ってギールはエディスの胸の尖りを指で抓む。粒だった乳首をこりこりと指の腹で捏ねられると腰が重たくなってくる。

「やめ、それ嫌だ……っ」

「それも嫌これも嫌って。なんなら許してくれるの？」

「お前が騙したりしなきゃ、なんだって」

こうなる覚悟をしてきたのに、こんな風に屈辱を味わわされるとは思っていなかったのだ。ちゅ、と乳首を吸われ、エディスは高い声で鳴いた。

「ひあうっ、あっ、ひうっ……んんう……っ」

中に出されたものが繋がってるところから溢れて、白く泡だっているのが分かる。泡が潰れたパチッという音も、奥がちゅばちゅば吸いついてる音も耳に届いてきた。

大きく出し入れをしていたかと思えば、今度は奥の方を蹴ってくる。毛が臀部をくすぐるくらいに深く入れられて、腰をぐるぐると動かされるともう堪らなかった。

ゆったりと抱き締めあって、静かに揺れる。いつもする、このギールそのものを表したような交わりが好きだった。

生理的に浮かんでくる涙を舌で舐め取ったり、頭を撫でたり。普段は甘えることが苦手で、強がってばかりいるエディスをここぞとばかりに甘やかしてくれるのだ。

「好き、大好きだよ……っ」

そう言いながら、ギールは手を伸ばして性器と後孔の間を指で押す。男性であるエディスは、女性と違ってそこにはなにもない。だというのに、押されるとたまらなく気持ちが良かった。

「んっ、んん……っ。あ、んう~~~~~」

「っ、狭くって、ん。気持ちいいよ」

息を弾ませたギールが首を舐めてくるので、曝け出す。

吸血鬼である彼は、いたくエディスの細っこく白い首筋を気に入っているらしかった。吸ったり舐めたりするのは常時のことで、たまに興奮が過ぎる時には甘噛みされることだってある。

「あ〜、駄目。イキそう」

小さく囁かれた言葉に心臓が跳ねた。恍惚とした顔のギールに手を取られ、下に導かれる。なにかと思っていると、きゅうっと熱いものを握らされて瞠目した。

「えっ、お、おい!？」

エディスの手の上から握り込んだギールが手を動かし、性器を抜く。熱いそれが一層膨らんで、今にも出そうだった。まるで自慰を手伝わされているようで、顔から火が噴き出そうになる。

「んっ、ん……っ、エディー」

呼びかけられ、なんだよと応えるとギールは笑って。気持ちいいよ、好きだって、そんなことばかり繰り返す。怒っていたことも忘れ、腹にも胸にも温かいものが注がれてくる。じわじわと熱がこもってきた。

「エディーの手、小さい。可愛い。形も綺麗で、好きだよ」

恥ずかしいことばっか言いやがってと怒鳴りそうになるけれど、幸せそうに目を細めて微笑むギールになにも言えなかった。

腹の中に注がれて、それさえ気持ちよくて喘いでしまう。だが、出したはずのモノが萎えていないことに気がつくと顔面を蒼白にさせた。